

漫 録

武生から敦賀まで

谷 口 生



福井縣南條郡武生町……福井市と敦賀町との中繼の地位にある武生の町は、さすがに賑はしい平地の町である。國道の真ん中を一間足らずの溝が、奇麗な水を湛へて流れてゐる。洗ひ水にもなり、消防用の水に使はれるさうであるが、雪深い此の地では掻き集めた雪を此の溝に押し出して貰うんださうな、道路の真ん中にある此の溝が截然と交通の流れを振り分けるから通行者には都合が良いだらうが……自動車を驅るべくは少し道幅が狭く、他の車や人たちに迷惑をかけること夥しい。矢ツ張り昔の街である。

福井市を中心に、奥越前から流れ出る丸頭龍川と、武生の町の東を流れる日野川とで形成する平原地から、敦賀、若狭方面に達するには、武生から日野川を遡つて今庄へ出てそれから滋賀縣境を迂曲する舊北國街道、今の府縣道武生今庄線今庄木之本線に依るか、武生から西、中國山脈の東端が伸びて敦賀灣を扼する山系を超え、海に逼つたその山系の中腹を進む舊敦賀街道、今の國道十二號線の二つの道路がある。前者は日野川を遡る平坦部があるが、迂曲を免れない、後者は海に出てからの景色が良いが、途中峭立して海に接した山の

中腹を縫ふ危険が伴ふ。どちらも、一利一害がある。私は後者即ち国道十二號線を、自動車で突破した。此の里程十餘里途中で自動車が海へ落ちたら……と一抹の危惧が腦裏を彗星のやうに走つたが、道路に親しむことそれ自身が、隧道の多い北陸線の鐵道による安易よりも幾倍か有意義であることだと考えた瞬間恐れも危ぶみも消えてしまつた。



武生の米庄旅館を出發したのが朝八時、自動車は六シリンダーのビツクの新型、運轉手は床次竹二郎氏が内相時代の運轉手を務めたと云ふ某君、夏の朝のはやいらだたしい陽の照り初めた町並を泰然スタートを切つた。北國街道の分岐點からしばらく行つたら直に山道に入つた。耕す人が、怪訝さうな顔をして自動車を見送る。子供が騒ぐ、聞けば、此の道路に自動車が入ることは、年に一度か二度かださうな。少し心細くなつて行く手を眺めれば、山又山と重なり合つて居る。「此れから少しの間は人家を見られませんが」と言はれた時、流罪の宣告を受けて、送られつつある俊寛に同情した。国道十二號線も覺束ないものだと思つて得ない。



道路は爪先上りに登り勾配ばかり續く、幅は二間乃至三

間あるけれども、通行の閑散なために真中三四尺しか道らしい所はなく、あとは人の丈ほどの萱が勢ひよく生ひ繁つてゐる。見え隠れした家の屋根も見えなくなり、鶏の聲も犬の咆えるのも聞えなくなつてしまつた。見えるものは山と、木と、細い道筋と勢ひよく生え茂つた萱、それに私たちの自動車、聞えるものはエンジンの響と草を撫でるタイヤの音ばかりだ。しばらく黙つたまゝ進むと、木の枝を背負つたお爺さんに遭ひ修路工夫に逢つた。何だか、懐かしいやうな氣がするくらゐに、人影を見た時の氣分が甦つた。



迂つた道を登り登つた所に、春日野トンネルがある。かなり長い、エンジンの音が四壁に木霊して騒々しく走つてゐたら自轉車に乗つた旅人三四人に逢う、この間二三回に六七人しか人に逢はない。珍らしいことに思つた。春日野トンネルを過ぎた所に、お誂へ向きに茶店があるので、峠の頂上だたとホット一息する。此處で、休息することにして車を降りて無骨な床几に腰を下した。運轉手君は、ラヂエーターに水を差したり、タイヤに水をブツかけたりしてゐる。上りばかりの道では、ラヂエーターがブス／＼と湯玉を立ててゐるのも無理はないが、タイヤを冷却させなければならぬほど

甚だしい摩擦をした事は、結局屈曲の多いためであるとか、恐ろしいことだと、今から先を一層氣持悪くさせた。

◇

茶店には例によつてお爺さんとお婆さんの二人きりだ、下の村から、店を出してこゝに來てゐるんださうだが、人通りの少い此處で、蜘蛛が餌を待つやうに、ポツンとして居る此の人達の境遇を、仙人みたいなものかな、などと考へて見た。何かないかと言へば、白茶けた餌の入つたお饅頭と、フヤケたやうな落雁を出した、他には何もないので聞けば鶏卵があると言ふ。願る無愛憎な商賣人だと笑はざるを得なかつた。藍模様の大きな皿と無恰好な爛徳利に藁で栓をした醬油入れ（此れ等の品物は、キツト此の人たちがお祝言をした當時から持つてゐるに違ひなからうと餘計な事まで聯想させる程古色蒼然としてゐる）それに鶏卵を籠に入れて持つて來た、鶏卵は饅頭や落雁と違つて頗る良い。立て續けに三つ四つ飲む、美味しかつた事は今に忘れられない。鶏卵の美味しかつた事は。此處でと、佐渡の相川から峠越して兩津港まで自轉車で飛ばせた（實はあんまり飛ばせ得ない技倆なので危ふく新潟へ歸り損ねようとしたが）時、途中澤根町の外れで休ませて貰つた時喰べた鶏卵、長野縣の南佐久郡の山奥

を馬に乗つて調査に行つた歸り、お尻の皮を擦りむいで、おかしな恰好で、小海停車場前へ馬から降りて休んだ時、その居酒屋で喰べた鶏卵と、此の三度の鶏卵の味は、何れ劣らず美味しかつた。

鶏卵と、珍らしく冷い清水とに元氣をつけて再び發足した、運轉手君はサア此れからだ、上衣を脱ぎ、ワイシャツの袖をまくり上げて構え込んで居る。茶店から先は、もう登り勾配のひどい所もなくなだらかに進む、しばらくして、人家が少しばかり固つてあり小學校の分校場が、東京のバラックのやうに、ポツンと立つてゐる。社野村の貝谷と云ふ所から十二區を過ぎれば、人家があるだけに、道に草が生えてゐなくなつた。袖なし襦袢に腰巻した百姓家のおかみさんが子供に自動車を見せに來る。犬が出る、猫が驚いて道を横切つて走る。靜かな山中の部落をかきまわすやうに騒がせて自動車は大良を過ぎ、いよく海に接した山腹道路へ出た。

◇

昔からの道路だけあつて幅員はかなりにある、が自然の地勢に壓迫せられて中腹を山の姿なりに曲り迂つて進まなければならぬ。運轉手君が、手に唾してハンドルを握りかえた。右手は數尺にして切り立てたやうな岩石、遙か下に浪の音が

聞えるばかりで、岸は見えない、左手は削り取つた山肌が黝く逼つてゐる。敦賀灣内の海は灰青色に光り遙か先方に立石岬に突出した山々が、海を劃つて横たはつてゐる、北國らしい粗大な景色ではあるが、裏日本らしい氣分の多い美しさがある。陽の光に映える波の燦き、先方の岸を嘯むかすかな波の白線、何れも美しく眼を喜ばせる……が、自動車のハインドルは眞に絶え間なく廻轉してゐる。後から見る運轉手君の襟足は、汗でギラ／＼光つてゐる。極樂から地獄へ引き戻されたやうな恐怖が、次から次へ来る、急な屈曲ばかりが折り重なつて私達の前にある、前輪の右側だけが、あの路肩から外れて迂つたら……岩角に叩きつけられた自動車と身體の事を腦裏に描けば、自然クツシヨンに、腰を一層落さすにはゐられなかつた。東浦村の元比田、大比田、杉津などの諸部落を過ぎる頃からそれでもだんだんと下り勾配になつて、山腹道路もなくなつた、右手に近く岩や小石の散在する海が間近に見え、松ヶ崎の名勝、赤崎丸山を通つて櫻の名所金ヶ崎宮が、あそこあたりだと教へて貰ひながら進み進んで敦賀の町並が見え初めたのは十一時頃であつた。



武生から敦賀までの國道は、地勢は勿論悪い、が、交通量

はまことに少い。あの春日野トンネル附近などは、まつたく無人境と言つてよい程人通りがない。昔時を偲び得るだけの道路幅を持ちながら、これこそ本とうに持ち腐れである。惜しいものだ。が若狭方面と越前方面とは所謂嶺南、嶺北と言つて交渉が少いらしく、普道路によつた交易は今では、まつたく鐵道によるの一方になつてしまつたらしい。鐵道其の他の施設のために、地方交通系統に變動を來すことは勿論であるが、私は武生敦賀間のやうに甚だしく荒廢した道路を未だ會て見た事がなかつた。沿線に物資の産出がないためか、大量の物資需要がないためでもあらう、が、此うして道路の荒廢が、日に増し甚だしくなるにつれて、地方も日増しに寂れて行く。せめて國道の名に對しても、心持よくドライブレ得るだけの道路であらしめたく、あの春日野峠の茶屋の爺さん媪さんたちを千客萬來で喜ばせてやりたい。併しながらそれが望み得られない事であるなれば、寧ろ國道の路線を適當なる幹線に變更することだ。徒に國道たるの空名のみを存置して置くこともあるまい。道路の改良のために先づ以て、道路の路線の慎重なる撰定の必要を此の武生敦賀間の國道で切實に感じた。

○東京市の惡道路

良い加減辛棒してゐるのに、大正十三年も終りに近づいた此の頃、未だ泥の海と埃の砂漠から逃れられない身を悲しむ、道を良くしたいものだとかキモキしても、お金の無いのか策が無いのか、何方か知らないけど兎に角東京市の道路は悪い。たまたま彼方此方にボツリ／＼とある舗装道路に出ると、東京より外へ出かけたやうな氣がする程珍らしい。雨降れば泥濘忽ち四街に發す……ではたまつたものではない。オーバシユースや、舗のやうな長靴を穿く事が、屈辱のやうな氣がするので、編上げ靴で出かければ、二三日は穿けない程泥を持ち込むゾボンの裾は泥まみれになる。家へ歸れば歩き方が悪いかの如く小言を喰ふ、靴は倍も損傷し、ズボンを汚して叱られながらも生きて行くために歩かざるを得ない。足は染つちやるない筈、ズボンの汚れないやうな道路が出来さうな筈だが……矢ッ張り舗のやうなゴム靴を穿いて私の一生涯を終るか……せめての腹癒せに京都の染物屋さんが、堀川で汚物の晒しをする時に穿いてゐるやうな長い／＼ゴム靴を穿いて、泥の海を飛びまはつて見ようか。(十八公)

◎海岸から獲らるゝ金剛石

一九一八年に阿弗利加西南岸で、干上つた海から獲られた金剛石は合計一、二八四、七二七カラットに達しその價格は二千六百二十六萬四千五百圓であつた。是は官人としての科學者の調査に由る長さ二百七十哩の海岸金剛石田から收獲されたのであつて、その發見は一九〇八年の事に屬する。此等の寶石は主としてボモナ地方で發見され、距岸十五哩以上を出づることなく、その多くは極めて小さくて、偶には一個三十四カラットのものがあつたけれども、平均すると一カラットの五分の一なのである。右の金剛石は或は水に近き海濱であるとか、或は砂丘の中に埋まつてゐて、種々の色彩を帯びてゐるが、その多くは鮮明なる白色で、他は黄色、淡紅色、帶紫、帶青、綠色乃至黑色のものである。而して又此等は南阿に於て發見さるゝものよりも、その生地に於ての光輝一層赫奕たるを特徴とする、

(一外誌より)